



フランスにおけるモンゴル・シャーマニズムの現状について

張 高娃
(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



「シャーマニズムにみる“癒し”の比較による考察」をテーマに調査を行うため、2023年12月2日から12月21日までの3週間、非文字資料研究センターの派遣研究員として、フランス国立高等研究院東アジア文明センターにお世話になった。私はこれまでモンゴル・シャーマニズムの信仰治療を中心に中国、モンゴル、日本などを調査してきた。周知のように、シャーマニズムという課題は世界中の話題で、いろいろな分野で研究されてきた。筆者は中国内モンゴル自治区・ホルチン地域に見られる、シャーマニズム的職能の一つである病氣治療について、民俗学の視点から文献調査と長年のフィールドワークを基に考察し、「科学が発達した現代社会において、なぜシャーマニズム的な病氣治療のニーズが高いのか」という問いのもとで、その背後の信仰治療の治療効果およびその地域社会との役割関係を考察してきた。特にシャーマニズムにおける精神治療と心理治療の研究はヨーロッパではかに進んでいる。そして、今回はフランスにおけるシャーマニズムにみる“癒し”の現状を調査し、博論で欠けている部分を補っていきたい。

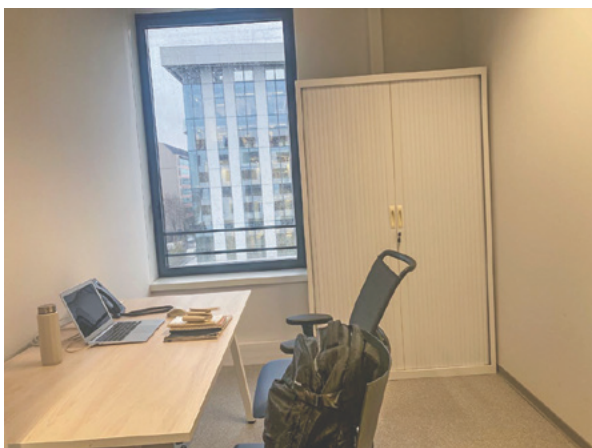
目的は持っていたが、私はフランス語が読めず話すこともできない。フランスの文化も民間信仰もよくわからない。調査や資料収集などできるか、どのように計画を進めればいいのか、事前準備も手探り状態で出発前までいろいろと不安があった。そんななか、出発前から受け入れ先のフランス国立高等研究院東アジア文明センターのハイエク(Matthias Hayek)先生が連絡をくださり、空港まで迎えにきてくれると申し出てくださった。そのことは心強かった。

ただ申し訳ないことに、パリ到着までハイエク先生を二時間程度お待たせすることになってしまった。その後無事空港で合流し、東アジア文明センターと研究室の場所や設備の利用方法、およびホテルを案内していただいた。ハイエク先生は日本語も堪能で、優しい先生だった。研究所の中で個人研究室と図書貸出しカードも用意してくれ、自由に使える環境を作ってくださった。またスキャナーの使用法まで案内していただいた。おかげで、私は最後まで時間ができると大学の研究室に行き、資料整理をしたりデータベース作成などをしたりして、過ごすことができた。新しいキャンパスなので、研究室に人がいることは少なかったけれど、居心地がいい研究室だった。

資料収集においては多くの先生や研究室の方々に助け



東アジア文明センターの年会の様子



東アジア文明センターの個人研究室



フランス国家科学研究センターの学生たちとの交流

ていただいた。今回のフランスでの調査成果はそのおかげである。フランスに着いた直後、2023年12月6日に東アジア文明センターの年会有ったので参加させていただいた。ハリエク先生は日本研究の代表者として発表された。年会を通して中国研究の分野でポストドクターとして所属している良忠氏と知り合って、学術交流を図った。彼の研究は古代中国における甲骨文字についてであった。その後、良忠氏は彼の知り合いであるフランス人類学者であるオーロラ（Aurore Dumont）氏を紹介してくれた。オーロラ氏は多言語に精通しており中国語、モンゴル語とロシア語も堪能であった。博士論文では中国内モンゴルフルンボイルにおけるツングス人をめぐる遊牧生活方式の研究をした。その後はツングス族群を中心に、彼らの宗教、シャーマニズムの復活について

研究をしている。そのため、オーロラ氏と意見交換をし、良い経験となった。これから共同研究も可能であると考ええる。

今回のフランスにおける考察を通して、フランスにおけるシャーマニズムの実態の一端を知り、モンゴル・シャーマニズムの信仰治療について改めて考える機会を得たことは大きな成果である。そして何より感動したのは出会った全ての方の親切さである。フランス国立高等研究院東アジア文明センター、パリで調査の協力をしてくださった先生方や皆さま、忙しいなか丁寧に時間を取って関わってくださったことは本当にありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。最後に派遣研究員という機会をいただき、お世話になった非文字資料研究センターの皆さまに心よりお礼申し上げます。